

優秀賞

## 思いやりのつまったせまい道

鹿児島県 田上小学校 三年  
古市 智也

「おばあさん、気づいていないのかな。」

ぼくとお母さんで、車にのって買い物に行った帰りのことです。手おし車をおしながら、ゆっくりゆっくり歩いているおばあさんがいました。ぼくの家近くの道はとてもせまくて、車が一台通るのがやっとの広さです。その道は通学路なので、毎日ぼくも通る道です。おばあさんは、後ろから来ているぼくたちの車にまったく気づいていません。

「いつになったら気づくんだろう。」

ぼくは少し、イライラとあせる気持ちになりました。でも、お母さんはゆっくりしたスピードで走ります。ぼくはお母さんに、

「お母さん、プップってならせばいいんじゃない。」

と言いました。お母さんは、

「いいよ、いいよ。もう少しいけば、よけられるところがあるから。」

どうしてクラクションならさないのだろう。そうしたら、おばあさんも気づくのに。

「ともや、人は年をとると、耳も遠くなるし、歩くのもおそくなるんだよ。大きい音にびっくりして、ころんでしまうかもしれないしね。」

と、お母さんはつづけて言いました。

「それに、自分のおばあちゃんだと思ったら、やさしい気持ちで待ってあげられるよ。」

そう話しているうちに、少し広くなったところまで来たので、おばあさんも気づいてよこに止まってくれました。すれちがうときに、お母さんはペコッと頭を下げて通りすぎました。おばあさんもニコツとして、ペこりと頭を下げました。ぼくはそれを見て、なんだか心がぽかぽかと温かくなりました。

ぼくも朝の登校や学校がおわって下校するとき、ランドセルがとっても思い日や、たくさん荷物を持っていかないといけない日があります。そんな日はかたもいたいし、足もつかれてすわってしまいたくなります。

雨がふる日はカサをさすので、車が来ていることに気づかないときがあります。そういうとき、運転手さんは、ぼくが気づくまで待っていてくれます。それと同じなんだな、と思いました。運転手さんのやさしい気持ちが、車にのって始めてわかりました。

この道は、ほかにもいいところがあります。車がすれちがう広さはないので、どちらかがよけられるところでよけて、待っています。おたがいにペコツしたり、手をあげたり、合図を送りあっていました。登校や下校のときには、地いきの人たちが声をかけてくれます。ぼくも大きな声であいさつをするようにしています。

引っこしてきたときは、せまいし、ふべんだなと思っていたけれど、思いやりとやさしさにあふれた道だと気づきました。運転する人も、歩いている人も、ぽかぽかの心をもっています。

このせまい道は、ぼくのじまんの道です。